

久喜市男女共同参画情報紙「そよかぜ」第16号 番外編

映画監督・演出家 久喜市くき親善大使

塚原 あゆ子さん インタビュー

東京ドラマアウォード2020 演出賞受賞「グランメゾン東京」や第49回日本アカデミー賞優秀監督賞受賞「ファーストキス 1ST KISS」を手掛ける塚原あゆ子さんへのインタビュー「そよかぜ」の紙面に載せきれなかった内容を番外編としてお伝えします！

Q：映画・テレビ番組制作の仕事をする中で、性別による業務内容の偏りや賃金の格差、女性というだけで偏った見方や考え方をされてしまうということを、塚原さんがこれまでに感じたことはありましたか？

私が入社した頃は、かなりありました。テレビ局にも男性ばかりで女性の方がいなかったし、テレビの女性監督って人数がまだ少ないんですよ。半分とかじゃなくて、男女比でいうと多分10分の1くらいです。これから増えていくだろうと思いますが、私が入社したときは女性の監督なんて、皆無でした。プロデューサーもディレクターも全員が男性でしたね。だけど、私が入ったときに女性でプロデューサーの人がいたんですよ。だから初めは「女はプロデューサーだよ」と言われていました。いつの間にか私は監督になっていきました。私が入社したときには基本的に女性は皆無でした。そこから約20年経って今はテレビ局内の女性の比率は半々くらいまで引き上がってきていますが、要職にいる女性はまだまだ少ないです。女性の助監督はいっぱいいますが、女性の監督となるとまだいいです。10分の1くらいかな。

プロデューサー…映画やテレビ番組などの企画立案や制作予算、スケジュールなど全体の管理や責任を負う役割。

ディレクター…作品の方向性などを決める。テレビ業界では演出家、映画業界では監督と訳され、制作現場の意思決定を行う役割。

Q：映画業界のジェンダー格差について、塚原さんはどのようなものが要因になったと考えますか？

多分、男女比は日本の会社組織と同じくらいではないですかね。一般職と総合職が昔はありましたよね。テレビ・映画業界には一般職がなくて、だから女性がいるはずの場所が、もう既になんていうんですよ。テレビ局の中にはありますが、私は制作会社の実働部隊なので、現場で仕事をしている実働部隊として、朝から晩まで動いているような人たちは大体男性だったんです。

総合職…主に企画・営業など意思決定やマネジメントを含むコア業務を担当し、幹部候補として育成されることも多い。異動や広いエリアでの転勤も多い。

一般職…主に事務や定型業務など組織のサポート・調整業務を担当し、異動や転勤などが少ない。



Q：映画業界ではもともと女性のスタッフが少なかったのでしょうか？女性が就く仕事が多かったのでしょうか？

多分映画業界で女性の位置（職種）はメイクだったと思います。メイクチームと衣装チームが先じて女性でしたけど、いわゆる助監督や監督の部署で男性ではない、女性がその仕事をするという常識がなかったんですかね。

Q：今は女性が映画業界の中で仕事に就ける職種が増えているのでしょうか？多様になってきて女性が進出してきたということでしょうか？

元々できていたと思います。昔だつて女性が普通にその仕事をやれたと思います。多分、募集をするような仕事でもないのですが、でもいなかったです、単純に。女性がその仕事に就くという常識がなかったです。例えば、昔は「看護婦さん」でしたが、今は「看護師さん」ですよ。そのときの男性で看護婦さんになりたかつた人もいたはずなんです。ただ「看護婦さん」と言われるとそこにわざわざ就職する人がきつと少なかったんだと思います。だから、黒澤明さんは男性で、昔、私は木下恵介プロに入りましたが、木下恵介さんも男性だつたし、何か始まりの人たちの性別が男性だつたので、多分男性が多かつたということですかね。

黒澤明 … (くろさわ あきつう/1910~98年) 「羅生門」、「七人の侍」など生涯³⁰

本の映画を監督として手掛け、アカデミー賞や国際映画祭など国内外の数々の映画賞を受賞した日本を代表する映画監督、脚本家。

木下 恵介 … (きのした けいすけ/1912~98年) 「二十四の瞳」、「楳山節考」、日本初のカラー映画「カルメン故郷へ帰る」など多くの映画の監督と脚本を手掛け、多数の賞を受賞。1964年にはテレビ界に進出、木下恵介プロダクション (のちのBBSスパークル) を設立し、「木下恵介アワー」をはじめ連続テレビドラマも数多く手掛けた。

Q：家庭での家事や育児の分担、夫婦間でのバランスがきちんと整っていれば、現場とすれば産休や育休から戻ってくる環境や受け入れができる状態なのですか？

はい。俳優部さんでもうされている方がいますよね。お子さんがいて復帰される女優さんがいるように、できると思うんですけど、やっている人がいるかと言われたら、女性の監督の数自体が少ないので、まだ前例ができ上がらないんです。だから、女性の監督の数を半分までとにかく増やしてから、ふと振り返ると、「これがジェンダー格差が埋まっていった10年だったね」と後で言うことはできると思うんですけど、いま、ジェンダー格差を埋めるためにできることがあるかと言われたら、もう『人数を増やす』以外にないですかね。



Q：塚原さん自身が映画制作現場のお仕事をされる中で女性ということで大変だったこと、苦労されたことはありますか？

得しているところもあると思うんです。そうしたことも必ずあって、そこを損していたところだけ言ったらフェアじゃないっていつも思います。女性の監督が珍しいので、例えば、恋愛の映画や家族間の機微を表すものとかは、男性よりも頼られがちではあります。その点、多分得していますよね、私。目立っているから、私が女性だから、仕事があるという可能性もかなりあるんですよ。でも、それだけではもちろんないので、しかも私が恋愛ドラマや家族ものが得意かといったらそうではないので、若干そこにはギャップが生じます。人数が少ない珍しさで絶対に得していることはあります。

ただ、例えば、山に行つてトイレを持っていけないとなったときに、女性の俳優さんと私だけ困るというパターンはあります。その時に声高に言わないとトイレが用意されていないんです。主張しないと気づいてもらえないということはありませんね。ただ女子が「困る」とみんなて話すのはトイレ問題ぐらいで、今そんなに何か差があるかと言われたら、そこまではないかなという気はします。

屋外のトイレは綺麗でないことも多いです。『綺麗なトイレにしか女性が入れなくて、汚いトイレに男性が入れる』というのは変じゃないですか。綺麗なトイレにしか入れない男性だっているの、そこはフェアなんですよ。だからそこはそんなに苦労と思わないかな。

あとは、「女の子は甘いもの好きでしょ」「みたいなことを言われるけど、別に好きじゃなかったりする時に、「女の子は」というその枠組みから中々外れられていないなということがありますけどね。その「女の子」は、いつから続いている女の子なのかなって思います。

Q：女性ならではの視点が活かされていることはありますか？恋愛や家族間の機微を表すような作品で頼られるということが活かされている部分なのでしょうか？

男性で私より女性の気持ちかわかる監督が沢山いるんですよ。そこにジェンダー差はないんですよ。胸キュン映画を撮っている人の8割は男性ですが、私には胸キュンは分からないのでやったことないです。だから難しいところですよ。個人の性質によると思うんです。

これかなと思うものは、もしかしたら（私であることで）違う意見が出る土俵にいられるかもしれない。私のチームだから、私には言いやすいということがもしあるなら。例えば、私が中絶問題に取り組むとなったら、私が女性だから取材相手が話しやすいので、私だから取材ができたということは可能性としてはありえますよね。そのジェンダーは、全ての人の『個性としてのジェンダー』というものはあると思うので。恋愛っていうのは、得意か得意じゃないかはジェンダーの外側にあつて、私は得意じゃないけど、得意な女性監督もいるし得意な男性監督もいて、今キュンとくるヒット作の恋愛ドラマの大体を熟練の男性監督が出しているの、この人は心がいつまでも女子高生のようにだわ」って尊敬している監督は沢山いらっしゃると思います。そこは、「女性だから」ということではないと思います。



Q：常に「何のためにお金を払ってもらえるのか」という自覚」を追い続けているのですか？

仕事はいつでも必ずあるものではないので、次の仕事があるという状況が私に対する期待感の証拠ですよ。私に次の仕事があるということは、私を誰かが信じてくれるから、来年、再来年の仕事を約束してくれるということですよ。その約束関係とくに恥じない、次の仕事までのスパンの動き方がまたあって、というサイクルで考えています。

(世間) 一般の人も休む暇なく仕事をされていますが、信頼関係の積み重ねのようなことは、八百屋さんと私の関係の中でももちろんあるんです。そこに行ったら必ず新鮮なものが買える、リンゴが置いてあると信じるからそのスーパーに行きますけど、突然リンゴがなくなったら行かなくなるわけで。その時にがっかりさせるといことが、仕事をする上であつてはならないんですよ。だから、がっかりさせないようにするための仕事の選び方と、でき上がる作品の質、鮮度がいいのかどうか、おいしいリンゴなのか、つていうことは、来年、再来年の私の仕事に直結してくるとい『自覚』ですかね。

Q：なぜ現場で着る服装が間違いだと気づいたのですか？

スカートでも仕事ができるということがあったからですかね。ミニスカートでパンツが見えるっていうのは、公衆の面前ではもうすでに駄目ですよ。そうではなく、撮影現場の仕事で、例えば、ハーフパンツではいけなかったかといったら、いけなくなかったな、みたいな。

何故いけないと思ったかという、多分女の子で足が出ている人が今までいなかったから、「きつとそういう服装はしない方がいいんだろう」と勝手に同調圧力のように考えて、そういう服装じゃなくしていたように思います。あと、ピタツとした細身のジーンズとかは履かないほうがいいのかなと思って、オーバーサイズの服を着ていたように思います。いま考えれば、むしろピタツとしたサイズの方が動きやすいんじゃないか、自意識過剰だったということもあるのかな。頭の悪い考え方をしていた自分だったので、そこまで考える必要なかったなと思います。今はみんなちゃんといろんな服を着ていますよ。

Q：現在はだんだん意識が変わり、スタッフの人数もバランスも変わってきて、男性と女性スタッフの見方とか考え方も差はなく、ジェンダー格差がなくなってきている状況ですか？

はい。今、半分までいかないですけど、3分の1は女性になってきていると思います。

ただ、重いものを持ちたりする部署もあるので、そこに関しては、全員女性だったときに個性として筋肉ムキムキの女の子や強い力持ちの女の子もいるけど、力持ちの女の子ばかりじゃないから、男性が多くなる、それも個性ととらえるべきでそれはジェンダー格差という言葉に集約されないと思います。例えば、カメラマンが20kgのカメラを担いで山を登らないといけないとなった時に、担ぎ手を別に発注するというのが必要であれば、それは一手あるかなという気がします。それがジェンダー格差を埋めるということなのであれば、それはこれから出るんだろうなと思います。重いものを持つのが無理とか背が小さくて届かないとか、実質的なことですよ。でもそれはジェンダーじゃなくて、重いものが持てない男の子も主張するべきなんです。「俺、20kgは無理だから、運び手必要です」と男の子が言えるようになったら、勝ちだなという気がしています。



Q: ジェンダー調査の結果から、映画業界において各部門の責任者とされるような意思決定者は男性が多く、逆にアシスタントは女性が多いとのことですが、塚原さんの現場でも意思決定者は男性が多いという現状はありますか？

社長とか会社組織の中の上の人は、まだまだ男性だなという感じはします。だからその意思決定だということであれば、多分男性がまだまだ多いだろうと思いますけど、現場でいうと、今は女性の数が増えてきている途中なので、まだ男性の方が意思決定する位置にいるんですよ。でも、それは多分女性が半分になれば、同じくらいになると思います。

男性だから意見が通る、女性は意見が通らなくてアシスタントに徹するのみ、みたいなことにはなっていないです。

ただ、今は男性の方がチーフ（責任者）をやっている率が多いので、自然にそういうアンケート結果になると思うんですけど、これがあと2、3年すれば女性と男性の数が同じくらいになると思うんです。そうなれば女性のアシスタント率っていうのは、自然と下がるんじゃないかなと思います。

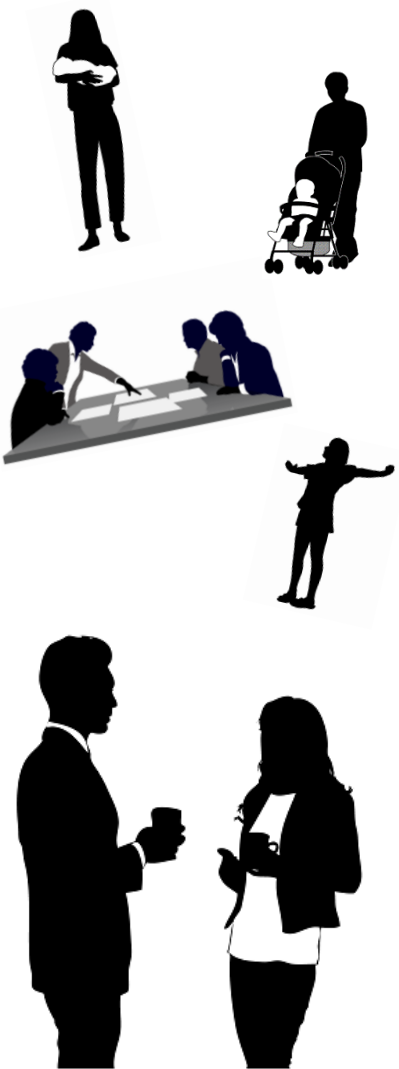
Q: 現場で女性に対する配慮は進んできていますか？

出産・育児に関しては、絶対に無理なことがあるでしょうから。いろいろな苦勞があるにしても、休暇としてどうしても取らなきゃいけないようになるタイミングだと思っています。

それ以外に関しては、個人の自由に任せられるかどうかと言ったら、「任せられる」と思っています。

例えば、「休暇を取りたいということが身体の問題なのだ」とはっきり言って休める子は多分取ってはならないとはなっていないと思います。もちろんうちの会社でもそういうシステムはありますし、取れる。取れないことは絶対ないです。「人間らしい仕事の仕方をしたいので、土日は休みたいですよ」と言ってくる社員もいます。それは分かりましたということではないんですけど。その主張自体を「する」か、「しない」かもその子に任せたい方がよくて、みんながみんな同じように「取らなきゃいけない」って変になると、取りたくない子も取らなきゃいけないようになって、その期間って1ヶ月のうちに、1週間あるとすると、4分の1働けなくなるわけで、私の言葉で言うところ「100円に乗らない時期（付加価値を上乘せできない時期）があるので、もっと頑張らないといけない」といけなくなってしまふんですよ。『人それぞれで選べるような土儀作り』は必要ですが、それを言い出すかどうかということとは、それを言い出した子もいるし言い出したくない子もいるので、逆に女性たちに任せてもらわないと困ると思います。

言いづらいという人ももちろんいると思うんですけど、言いづらいと思うのも自由なので。『言いづらいんだよね、じゃあ言えなかったから、今休暇取らないよね』ということになりますね。逆に会社が配慮して本人が言えないから察して何かするということではないですよ。それは主義主張しながらその権利を勝ち取っていくものなので、そこを何か社会全体が察しなきゃいけないと思うのはどうかかなと思いますね。察せられたくない女の子もいるので。



Q：映画作りや作品作りの手法は変わってきているのでしょうか？ドラマ「ザ・ロイヤルフアミリー」で北海道の空から美しい情景が撮影されていました。技術が進むことによつてこれまで表現できなかったものが表現できるようになるのでしょうか？

出てくると思います。それこそAIの技術が発展したことで、CG技術は多分これから私たちが考える斜め上を行くと思います。例えば、「ザ・ロイヤルフアミリー」で私たちは馬が本当に走つてくれないとレース映像は表現できないと思つてやりましたけど、次の段階はもしかしたら馬のAIが自然に動いてくれるみたいな可能性もあると思います。それこそフィルムから、今はデジタル撮影になっていて、昔はいわゆる「はい、カチン」から「はいカッ ト、カチン」までの間の部分が、短ければ短いほどよかったです。フィルム時代は（長く なる）とどんだお金がかかっちゃうので。だから、映画はお金かかっていたんですけど、今は映画もデジタル信号になったので、何度も上書きできるんです。だから、何度も撮り直 しができるようになったりとか、カメラも今は暗くても映るカメラになったりとか、そもそも iPhoneで映画を撮れる時代なので、可能性は無限に広がっていくと思いますよね。

描きたいものが本当に描けるようになってくると思います。だから逆に、いろんな手法が 想像できる監督でありたいですね。いろんな手法があるのに、その手法が生かせないでいた ら、『私の時給』は上がっていかないだろうなと思います。

Q：時代が変化したことにより、塚原さんの作品で男性と女性の描き方に変化はありますか？またご自身で意識している描き方はありますか？

私個人の作品の中で、男性だ、女性だということをおそらく意識したことがないので多分、 気にせずにキャストイングしていると思います。例えば、警察の幹部というキャラクター が、男性でも女性でもいいという感じでキャストイングしているんです。だから、「警察の 幹部男性」と書いてあれば男性なんですけど、書いていないときはどちらでもなく台本を読 み解きます。

「男性か女性を決めないといけない」ということがまずあって物語ができたりの不幸だとは思 います。「どっちでもいいじゃないですか、それ」というぐらいの柔らかな枠組 みにしていけないと、逆にやりづらくなってしまう。逆にその作品の可能性を下げると思っ ので、何を描いてもいいんです。頭から「そういうものをしてはいけないから作品ができな い」となるのは、どうなんでしょうか。

Q：作品を作る上で時代性は意識していますか？

例えば、ドラマ「ザ・ロイヤルフアミリー」で、女性からプロポーズした場面がありま す。それは原作にあるのでそうなんですけど、それを「織り込みたいな」「それをぜひやっ たほうがいいな」と思ったのは、今の女性像、今の私たちが「カッコいいな」と思う女性像 に、私は読み解けたから素敵だなと思つてそのシーンを描きました。

でも、15年前にそれをやろうとしていたら、多分「挑戦をする女」という受け取り方を されたかもしれない。人数というか、数の理論で、その役をやっているナースマンがいなか ったから「看護師」という名前がなかったように、『以前の常識』と『今の常識』が違いま すよね。だから今、女性がプロポーズするということに対しての、 温度感、世間にどう映るかなということを意識しながら、作るべき だと思つし、作っています。



Q：制作現場のジェンダー比は、作品作りにどのような影響を与えていくと思いますか？

個性でしかその作品には適進できないので、女性だから男性だからというよりは、いろんな考えを持った人が今は10分の1しか女性がないことで、比率として女性の中で持っている意識があんまり現場に流れていきづらかった。それが半分になることで常識だと思ってることのバランスみたいなものの新しい段階に突入するのではないかなと思います。

逆に女性ばかりになって男性が少なくなっていくという未来も、私たちの業界には起こり得ると思っています、それはそれでまた別の世界が見えてくるはずなので、それでも別にいいと思うので、そこに危機感も何もありません。

Q：塚原さんの10年以上の先輩、または同じように監督をされている方と比べてどのような違いがありましたか？

日本国内で、女性監督で、テレビも映画もやっている人が、パツとは思いつかないぐらいいないんです。映画の方はいるんですけど、テレビも映画もやっているという方はいなくて、多分テレビの方が少ないのではないですかね。

でも、先輩と言っても10年ぐらい上の方ですかね。河瀬(直美)さんや西川(美和)さんのような女性の映画監督はいらっしゃいますけどね。ただ、その方たちは生粋の映画の方なので。私みたいに会社に所属しているわけじゃないんです。どちらかというと作家さんに近いような演出の生き方をされていて、自分のやりたいものを自分の脚本で、3年温めて1本というような映画の仕事の仕方です。私はどちらかというと会社員なので、会社員で、女性で(テレビと映画)両方やっている人はパツと思いつかないです。

映画の方だと、彼ら、彼女らが撮ってきた世界では、女性だから描けるっていう世界では決してなくて、彼女の個性で描ける世界を追求していらしていますが、女性が少なかったばかりに今もなお「女性監督」と言われていると思うんです。

これは払拭したいなという思いで、数を増やしていく一員になりたいなと思うので、そこに今後沢山の人が参加してくださるようにPRしていく。「女性の監督いますよ」「大丈夫ですよ」「できますよ」と言わないと数は増えないだろうなと思うので。

Q：塚原さんのお話では企画書をもって進んでいったのですが、塚原さんから見て他の女性たちも同じように突き進んでいっているのでしょうか？

業界の女性監督だけでいうと数が少なすぎてモデルケースがないのですが、周りの同年代の友達とか、一線で働いていらっしやるような方たちを見ると、やっぱり『茨の道』を切り開いている感じは皆同じように受けとめられているので、一緒なんだなと思いますね。

いわゆる銀行の女性の幹部の人が1%以上いるのか分らないですけど、結構まだ少ないのではないかとお見受けしたりするのを含めて、大きな会社の社長は何となくまだ男性で、それはなぜなのかは分からないんですけど、きっと何か理由があるんでしょうね。人口の男女比率が2分の1ずつだとしたら、元々「男性が社会に出て行って、女性は家庭に入る」という、ベースのスタートがあった歴史はまだ影響しているんでしょうね。

色々なことに自由さ、生き方に対して自由さを求めていくとしたら、男性も育児で家に入るといふことの自由を謳歌すべきなんです。それは逆差別だと私は思うし、男性がなぜ育児を取りづらいのかということも、同時に話されなければいけないかなと思うんです。そのあたりの議論をするということも『茨の道』を進んでいるなと思うので、沢山の議論と沢山いろんなケースがあって、その人それぞれのケースが積み重なっていった先に本当に柔

軟性のある働き方というモデルが見えてくると思うので、まだまだその途中段階だなとは思いますが、確実にその途中段階を、私がいる業界も、私の友達がいる周りの業界も歩んでいるなという感じがしました。


Q:「ご家族との時間や家事のやりくりはどのようにしていますか？」

掃除とかは、私が行っているかも。洗濯は基本的に旦那さんがやっているかな。私もやったりはしますが、食事を作るのは私が行っていますが、片付けは旦那さんがやっていますかね。犬がいるのですが、犬の散歩はお互いやっていますかね。

Q:「ワーク・ライフ・バランス」という考えは映画界でも浸透し始めているのでしょうか？

はい、すごく浸透してきていると思います。「夏は休みたいため、仕事を入れません」というフリーの方もいますし、いま、日本の夏は結構暑いですよ。だから、夏になったらスタジオを多めにして、「暑くない環境を整えて仕事をしようよ」と、つらい思いをしないように生きていこうよという感じにはなっていますね。人生設計なども部下と上司が話すことができる環境作りもできているので、長くやりたい人と、そこまで長くやりたくなくて途中でバラエティに行きたいという子もいますし、そのあたりも柔軟になってきているなと思います。

ワーク・ライフ・バランス:「仕事と生活の調和」の意味。仕事か生活かの二者択一にならないよう、個人の置かれた状況に応じて、多様で柔軟な働き方を選択できる環境が理想とされる。仕事と生活の調和を図ることで両者ともに充実させるというもの。



今回、塚原さんには多くの質問にお答えいただき、普段知ることのない、テレビや映画業界の現状を詳しく教えていただきました。女性の社会進出が進んでいる現在、様々な業界で性別に関わりなく働きやすい環境が整いつつあるようです。

塚原さんのように現状でもまだ女性の少ない映画監督・演出家という立場の第一線で活躍する姿やその考え方は、後に続く女性たちにも大きな勇気を与えてくださっているのではないのでしょうか。

また、男性、女性の性別にとらわれることなく、「個性」を大切に、個々を尊重していくことはどの社会でも、意識していくことが重要なのだと感じました。

多くの質問に丁寧にお答えいただいた塚原さん、そして最後までお読みくださった皆様、本当にありがとうございました！

